

「学生の考える良い授業」を分析する

新任教員による学生アンケート分析結果から

大学開放実践センター教授

森^{もり}

和^{かず}

夫^お
(職業能力開発)

学生が大学で過ごす生活の大半は授業に参加することである。時間割に従って、次々と講義や実習に参加する。学生は「勉強しない」とか、「遊んでばかりいる」と言われるが、果たしてそうだろうか。私はこのような見解は「部分を見ていて、全体を表していない」と考えたい。勉強がしたくないのに大学受験までして入学したのは何だったのだろう。学生は、自らの明日のために学習しようとしているのだ。

学生たちから見た、良い授業・悪い授業

今年度の「教育方法学」前期授業が始まった際、私は冒頭にアンケートをとった。学生62名に、「これまでに受けた良い授業と悪い授業」について具体的に箇条書きに列記してもらった。これらの学生は主に3・4年生。さて、さまざまな回答があった。具体的に見ていただこう。「あなたがこれまで受けた授業の方法について、良い授業例と悪い授業例について箇条書きに書いてください」という問いである。合計で「良い授業の例」は234件、「悪い授業の例」は198件あった。次の記述はその回答のほんの一部である。

「良い授業の例」

1. 学生が調べたりする
2. 理解できるような小さなコツを教えてくれる
3. 教師がちょっとしたヒントを与える
4. メリハリがある
5. 楽しそうに話す
6. マメ知識を言う
7. 学生の参加意欲を充分に出させるような学生への問いかけ
8. なかなか発言しにくい学生に対し、文章を書かせる方法
9. 全体の雰囲気になごやかで、先生と学生と一緒に楽しめる授業
10. 学生個人個人の良い所を充分にのびし、発揮できる授業
11. 先生の伝えようとする内容が明確にわかる授業
12. 先生が学生に問いかけ、考える時間を与える
13. 大切なところをはっきり教えてくれる

「悪い授業の例」

1. 教師の考えだけで判断される
2. できなければ、とても怒る
3. 終始一定
4. だるそうに話す
5. 意味不明な脱線をする
6. 学生が参加するというよりは、先生が一方向的に話し続ける授業
7. 学生がゆっくりと考える時間がなく、進むのが速い
8. 同じことを何度も言って、テンポが悪い説明
9. 何を言っているのかははっきりみえてこない授業
10. 内容が難しすぎてわからない
11. 先生の声が小さく、メリハリがない
12. 質問しにくい
13. 先生が、学生がうるさいのに注意しない

新任教員が「良い授業」と「悪い授業」を整理すると……

現在、徳島大学では全学FD推進プログラムを進めている。このプログラムの一つとして国立淡路青年の家に合宿して新任教員研修を行った。この時に、参加した22名の教員に学生達が書いた回答を分類し、何を訴えているかについて集約してもらった。4グループに分かれて作業が始まった。学生達たちの意見は1件1カードに切り離してある。432枚のカード

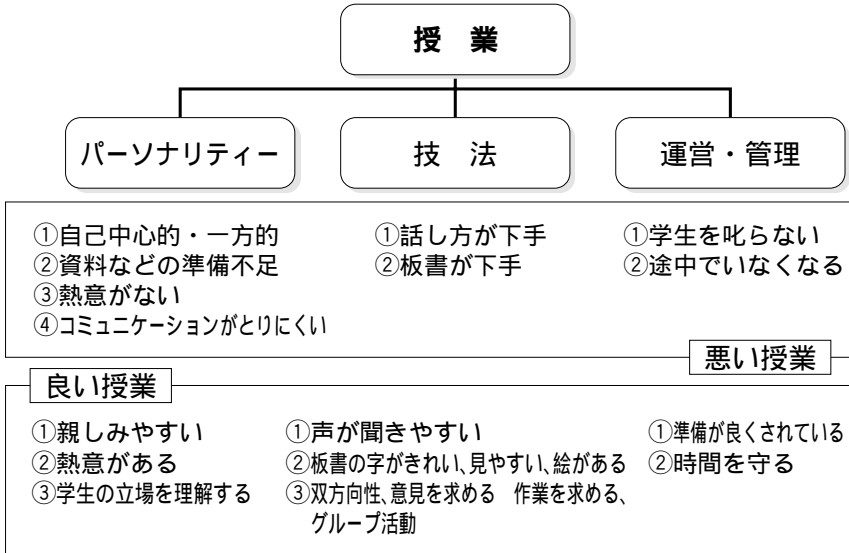


図1 第1グループの意見集約結果

ドを読んで、集約するのだ。各グループは一斉に同じ条件で作業を開始した。出てきた結果はグループの特色を反映して興味ある結果になった。順次見てゆくことにしよう。ここで扱う図表は当日説明されたOHPシートの原図そのもの、もしくはそれをもとに作成したものもある。

図1は第1グループの結果である。このグループでは授業の良し悪しを「パーソナリティー」、「技法」、「運営・管理」の3つの側面で整理している。単に技法だけの問題ではなく、姿勢や構えといった態度面や運営管理の面も強調している。意外にも学生の振る舞いの甘えや野放しは許さないでほしいと言う意見をこのように運営管理面で位置づけている。この図を要約すると教育に熱心で、学生の立場で考え、行動し、授業スキルも良く、インタラクティブな授業を展開すると言っていることができる。

熱意だ

第2グループは図2でまとめていた。学生参加型で教材に工夫がなされ、プレゼンテーションに優れていること、そして教師の熱意と優れた教育方法があればよいのである。これは更に一言で言えば教員の授業に対する「熱意」に尽きると説明している。全く要を得た図である。簡潔明解に示している。また、「熱意」という言葉の中に全てが言い尽くされているのである。なかなか、ここまで要約はできるものではない。

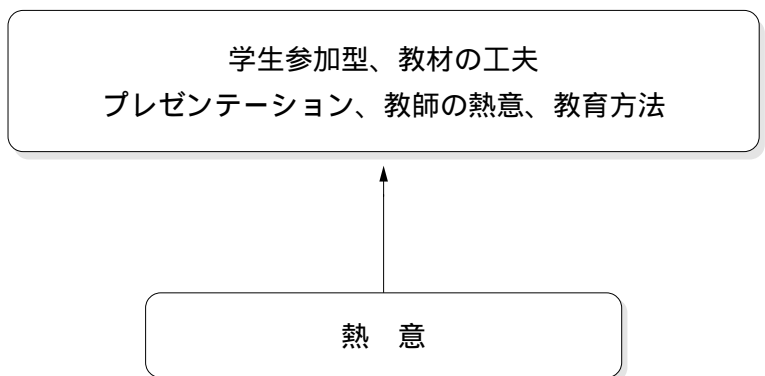


図2 第2グループの意見集約結果

さて、第3グループのまとめを図3に示した。このグループの整理の仕方は「プレゼン技術」、「参加型」、「学生の反応」というキーワードにある。特に、「学生の反応を見ながら」という言葉に特色がある。「臨機応変に対応できる授業」という文とあわせて理解すると、授業の中で起こる様々な状況への対応が求められていることがわかる。授業は生き物であるし、対象も内容も日々変化している訳だから、指導者が予め決めておいたストーリーに必ずしも合致できるとは限らないのである。「こうしてやるう、ああしておこう……」と考えていてもその

続いて第4グループを見てみよう。図4は学生たちが授業に不満を持つプロセスを仮説的に

不満スパイラル

通りにならないことがある。その時に「どう対処できるか、どう効果的な成果へと変更できるか」が問われる。学生から見れば先生を理解したいし、同じ土俵にのって話がしたいのである。そして、公平に扱ってほしいのだ。さらには人間として立派な先生から学びたいと求めていると解釈している。教員としてのプロ意識と専門性が問われているのだ。

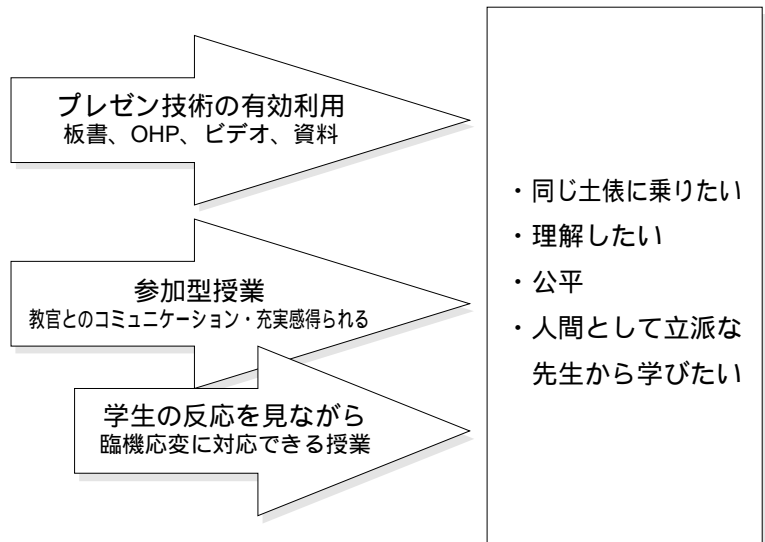


図3 第3グループの意見集約結果

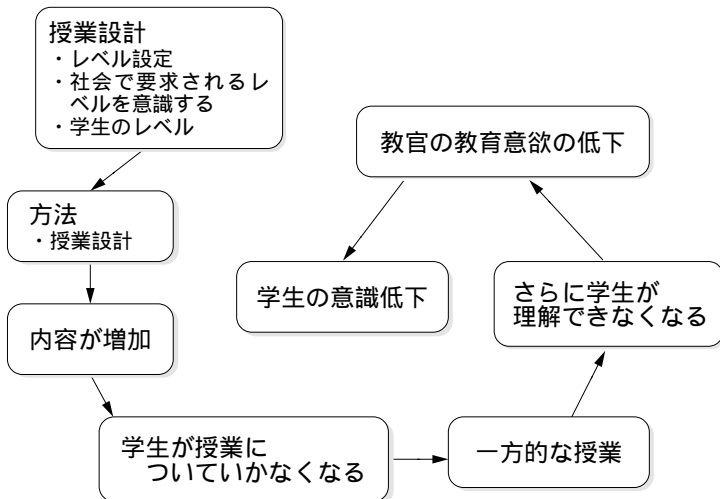


図4 第4グループの意見集約結果 不満スパイラル

描いたものである。教員たちは授業を設計する時、そのレベル設定を社会の要望レベルと学生レベルを考えて設定する、そうすると内容は増加することになる。限られた時間で内容の増加を消化しようとするれば、教員による授業効率化への取り組みが限り学生は授業についていけなくなる。そして、詰め込み的な一方的な授業になるのである。すると、さらに学生は内容の理解ができなくなり、それを見た教員は教育する意欲が低下する。このようにしてその教員のもとで行われる授業は学生のやる気をも奪ってしまうことになる。

このグループでは、良い授業の条件を図5にまとめている。学生たちにグループ学習や自習を促すなどしながら対話を図っていくなどの「学生尊重」が条件としてあることを示している。さらには授業そのものの質的向上をめざしてわかりやすい授業とその準備などの「技術」があることが条件として挙げられる。これらの「技術」と「学生尊重」は究極的には「教員のやる気・熱意」を基礎にして動くものと考えられている。

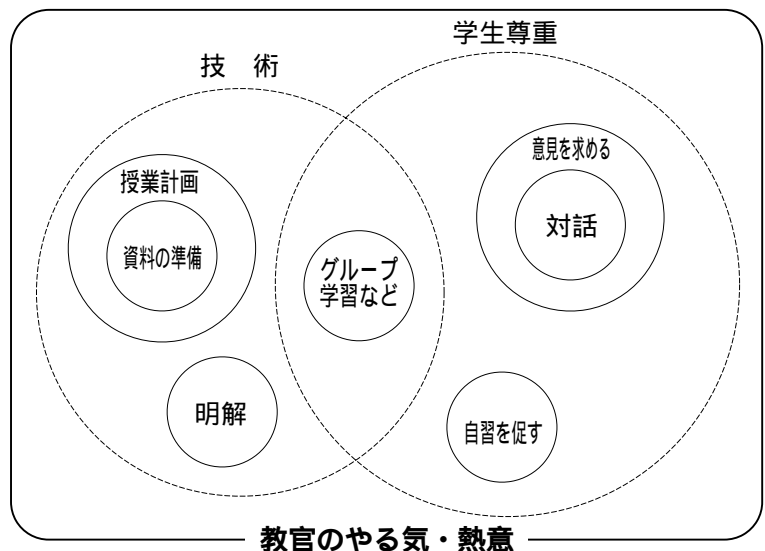


図5 第4グループの意見集約結果 良い授業の条件

良い授業をめざして、何をすべきかと考えること……

第1は相互コミュニケーションのある授業をめざすことだ。この分析の中にもあつたが、例えば・参加型、インタラクティブな授業、対話ができる、親しみのある、双方向のやりとり、一方的な語りを排除するなど、適切に展開に努めるのである。このことで教員自身がやりがいや手応えのある授業時間と変えることができるだろう。第2は学生の状況に合わせる、学生中心の教育を展開することだ。教員中心の授業はもはや化石となつていっていると云つてよいのではないか。授業の主人公は学生であつて教員ではない。学習者が主体的に学習しなければ学習は成立しないのである。学生が何を思い、何を考えるかを見据えた上で、教員は自分の思うように授業で演じればよいのである。熟達した教員はこのようにアクションして見せることができる。第4は授業に必要な技術・技能を獲得し、工夫して十分に使いこなすことだ。ある大学の教員は自分の授業を良くするために「話し方教室」に通つていたということを聞いたことがある。ここまでしなくてもよいのだが、技術・技能を学習する機会があれば貪欲に参加してついでくるくらいでないとならない。プレゼンテーション技術やインタラクティブな授業は必需品であろう。これらを身につけるにはFD活動は願つてもないチャンスではなかるうか。現在、徳島大学では学部レベル、個人レベル、全

学レベルでFD活動は活発に展開中である。届くところにそれらはある。第5は教員としてのプロ意識、プロ・アクションがとれることだ。学生たちは教員たちをその学問分野のプロであると同時に、その学問の教育のプロとして期待し、そして授業に臨んでいるのだ。私は大学受



ワークショップでカード分類中

験のための、ある国立大学のキャンパス見学会に行ったことがある。確かに学問研究には情熱を感じたが、その授業を見て失望した。こんな授業に魅力を感じて入学したいと思う高校生がいるだろうかと疑問に思ったものだ。よほど予備校の方が楽しく、しかもわかりやすいのであ

る。映像時代の若者たちにあの感覚で授業が行われるのであれば、当然ながら、教員が期待する学生にはなるはずがない。大学は研究機関であると同時に高等教育の機関でもあることを認識し、その教育に従事することのプロとして行動しなければならぬのである。第6に学生たちの目標としての人となることが求められる。いつかはあのような研究を行い、学生たちに熱く語ることをしてみたいと思わせなければ、何が高等教育機関の教員であろうか。この原点に立ち返ることがFD活動の原点でもあると言いたい。

学生たちが示した「よい授業」へのコメントのひとつひとつは、教員たちにとって決して遠くはない努力目標を示していた。もつと踏み込んで言えば、その目標が遠いと感じるが、近いと感じるかは大学教員としてのプロ意識を判断するリトマス試験紙であるように思えるのである。

